

春。晴れて仙台二高に合格した私は、途方に暮れていた。

二高に入ろうと思ったのは小4のとき。それから丸5年、塾に通って自分なりに勉強はやってきたつもりだ。しかし、5年も経ったのにそのあとの「二高に入ってからのこと」が一切決まっていない。15歳、長年の目標を果たした私が将来について決めていたのは「作家になる！」ことだけだった。

無論、物書きだけで食べていこうなんて無謀だとはわかっている。だから何か本業としての仕事、作家として有名になるまで名刺に堂々と載せられる名前が必要なのだ。それが決まっていない。

何も考えていなかったわけじゃない。マーケティング、法医学、広告代理業、経営…興味ある分野はたくさんあった。だから今回の東大見学会では、自分の興味あることを当たれるだけしらみ潰しに当たった。その成果はあったと、私は大満足と言える。

1日目の新潮社さんへの訪問。新潮社さんとしては訪問を受け付けるのは初の試みだったそうで、予想外の偉い方の登場に軽くパニックに陥りながら企業訪問がスタートした。

お話を聞いた印象では、新潮社は内容も本そのものも宣伝も全てひっくるめての『本』という存在に大きなこだわりを持っていると感じた。もともとその話を詳しく聞きたいと思って新潮社さんを訪問先と決めたのだが、想像以上である。電子書籍、ネット小説が普及し活字離れが叫ばれる昨今、だからこそこだわりを持って本を作らなくてはならないのかと感じた。ただ本であるだけ、書店の棚にちょこんとあるだけでは手にとってもらえない。真っ先に話題に上ったのが「新潮文庫の100冊」であった。本の面白さを知らない人たちに本を身近に感じてもらうためにあるもの。実際に配られて読んだが、すごいことにちゃんとストーリーがある。解説も分かりやすく、ついつい読みたくなる。事実、私は仙台に帰った後に本屋に寄ってしまった。

と私は身をもって証明したが、読者目線で考えることがやはり重要らしい。例としては、有名人の感想を載せる。「読者」と聞くと私は本を日常的に読む人のみをイメージしがちだが、平たく言えば日本全国誰もが「読者」。だから宣伝も読者目線で工夫を凝らす。人はきっかけさえあれば突き進める生き物なのかもしれない。「本を読む糸口」を提供するために行われている工夫に圧倒された。

新潮社さんはスピンや紙、その厳しきで有名な校閲など本も高い品質を追求している。平成生まれのくせにデジタル媒体で文字を読むことに違和感がある私としては、その姿勢に共感しおこがましいがこれからも貫いてほしいと思った。紙にペンで書くこと、紙の本をその重さを感じながらめくっていくこと、それが過去のものになるとしたら、私は耐えられない。どれだけ科学技術が進歩しようとしてもそれだけは失ってはいけないと思う。話が逸れてしまったが、新潮社さんが作り出してゆく本という芸術とも言うべきものに、私の文章も貢献できればと思う。

自分の興味あるもの、すべてにアタックした2日目の東大見学。赤門前で記念撮影をしている人がいたが、合格してもいないのに撮っても無意味だと思って私は思わず顔をしかめた。しかし門をくぐった瞬間、しかめつらはぼかんと口を開けたせいで跡形もなくなった。真っ先に目に入ったのは木の緑だった。そして建物の古めかしさ。ガラス張りの建物やコンビニはそう言った建築物からはある意味隔離されているように見えた。しかしそういう現代の建物やスマホやパソコンがあっても違和感がないのは敷地全部が木の緑で埋め尽くされある意味統一感を持っているからか、と思った。ドトールさえも見事に溶け込んでいる。

さてつい前の行まで熱く本を語っていたが、私は理系選択である。理由は、文系も理系もやりたくて、理系の方が授業をしっかりと受けないと理解が追いつかないと思ったから。今はどの職業

も文理両方求められる、とOBの方がおっしゃったのが印象に残り、両方やるという自分の発想に少し自信を持った。

そんなわけで私が東大で向かったのは文学部と経済学部の模擬講義と、医学部の展示。医学部ではパンフレットの印刷ミスで楽しみにしていた法医学の展示が見られないと知り、受付の方をお願いして資料を頂くことができた。実は医学部を見に行こうと思ったのは、前日の新潮社訪問で班員一同たくさんの本をいただき、その中にあった医療ミステリーを夢中になって読んでいたから、というのも一部ある。その本の主人公の医師は「診断」のスペシャリストだが、同じ医学でも私も予防医学より病気を特定したり原因を究明したりする方が興味がある、と展示をざあっと見て初めて気づいた。文学部については、大学で学ぶよりかは自分で好きに読んで書いて考えたいという気持ちの方が強いとわかった。経済学部では、自分が本当に興味があるのは経済そのものじゃなくてそれに振り回される人間や社会の動きだと気づいた。

経済についてのみならず、私は人間を研究してみたいとふと思った。生物学的なところでは医学、いわゆる『人間的』とされるドロドロした感情や社会の揺れ動きについては文学、その双方向から攻めたら面白いものが見えてくるかもしれない。これでいこうと決めたわけじゃなくまた変わるかもしれないが、東大を埋め尽くす木々の木漏れ日の下で私はそんなことを考えていた。東大という場所に来なかったら考えもしなかっただろう。

今回の東大見学会でやりたいことが一気に決まったわけではない。しかし、なんとなく自分の興味の向く方向の規則性は見えてきた。いや、興味に規則なんてあったらつまらない。共通項というべきか。大学に目的を持って来て欲しい、とOBの方の一人がおっしゃっていた。ここで勉強したい、と東大に来てみて思ったが、じゃあ何のために大学に行くのか、ということは模索していかなくてはなるまい。二高を受験するとき目的なんて深く考えていなかった私にとっては、その模索すること自体が必要なのだろうと思う。学校を決めてからそれに合わせて理由を考える、などと本末転倒にもうならないように、自分がやりたいこと、興味あること、高校じゃ足りないかもしれないことを一つ一つ踏みしめるように見つけながら勉強していきたい。あれ、それじゃあ今までとやっていることは変わってない？いや、ただ知識の羅列をノートに写すのと、何かを見つけた気満々で授業を受けるのとではポーズは変わらずとも入り込む内容が全然違うはずだ。人生はずっと勉強し続けるものだと言う。もちろんこの姿勢は人生におけるすべての『学び』に言えることだろう。

自分の興味の本质。とりあえずこれを見つけるまで、私は走り続けよう。